View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

「私」をめぐる問い――ヴァレリー・ラルボー「テゼの船」

瓜生　濃世

はじめに

ヴァレリー・ラルボーの「テゼの船」（« Le vaisseau de Thésée »）は、1932 年に文芸誌『コメルス[(1)]』（*Commerce*）に発表された。その後この短編は、15 編のテキストが収められた『ローマの旗の下で』（*Aux couleurs de Rome*）（1938 年）の最後を飾る作品となっている。『ローマの旗の下で』に収められた短編の大部分は、小説ともエッセイとも分類し難いものであり、内容やジャンルも様々である。ラルボーがイタリアをこよなく愛していたのは言うまでもないだろう。実際に彼は幾度となくこの国に滞在し、生涯の伴侶となったマリア・アンジェラ・ネッビアがイタリア人ということもあって、イタリアには格別の思いを抱いていた。彼の著作の中では、イタリアに関する言及やテキストが多く見受けられる[(2)]。そしてこの短編集は、タイトルから明らかであるように、ラルボーがイタリアにいわばオマージュを捧げた作品である。

「テゼの船」の興味深い点は、何といっても主人公の人物像ではないだろうか。ラルボーの代表作である『A.O.バルナブースの日記』（1913 年）、短編集『幼なごころ』（1918 年）そして内的独白を用いた『恋人よ、幸せな恋人よ…』（1921 年）や『秘めやかな心の声…』（1923 年）の主人公たちは主に 10 代から 20 代の若者たちであり、彼らの若々しい感受性や繊細な内面世界の描写にラルボーの特徴を見出すことができる。だがこの短編は、それらの作品とは主人公の人物像において大きく趣が異なっている。アンヌ・シュヴァリエの指摘にもあるとおり[(3)]、「テゼの船」の主人公ボンシニョールはラルボー作品に典型的な人物

――裕福で文学に造詣が深く、コスモポリットな出自――ではあるのだが、少年でも青年でもなく、すでに妻子がいる 47 歳の男性なのである。彼は、バルナブースのように優雅な放浪生活を送ってはおらず、ホテル業を営んでおり(4)、投資家でもある。しかしながら、中年男性の手記という体裁のこの短編においても、ラルボー作品に典型的なテーマ――「私」をめぐる問い――を見出すのは容易である(5)。社会的に高い地位にあり、妻子がいるにもかかわらず、主人公ボンシニョールは他者の視線を気にしながら、自分が何者であるのか自問を続けるのである。

本稿では、この中年男性が抱える「私」に対する問いのあり方を、他のラルボー作品の若き主人公たちの葛藤と比較し、さらには作者ヴァレリー・ラルボーを思わせる「V. L.」という頭文字が手帳に記されていることに注目し、その意味を検討したい。

Ⅰ.「幸せな理由」のリスト

主人公のシャルル=マリー・ボンシニョールはイタリア系スイス人であり、彼の妻は四人目の子供を妊娠している。仕事でパリに出張した彼は、「休息と孤独」を得るために滞在を一週間延長し、胸中に湧き上がる思いを「手帳（carnet)」に記し始める。こうした内容の「テゼの船」はいわば一種の日記形式の作品ではあるのだが、日付が欠けており、曜日のみが記されている。そしてⅠからⅨまでの番号が振られており、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは同日の日曜日、Ⅳは月曜日、Ⅴは火曜日、Ⅵは木曜日、Ⅶは金曜日、Ⅷは土曜日、Ⅸは日曜日となっている。

日記という形式は『A.O.バルナブースの日記』を思い起こさせるが、量や内容に大きく隔たりがあり、容易に比較はできない。主人公はページにその日の出来事も記すが、むしろ過去の体験に遡り、様々な思索にふけっている。いわば精神的変遷の記録とも言えるこの作品からは、『幼なごころ』の中の一篇「夏休みの宿題」、さらには内的独白が用いられた小説『秘めやかな心の声…』に部分的に近い印象を受けるのではないだろうか。例えば、「夏休みの宿題」におけ

る少年の心理の変化である。主人公である 13 歳の少年は、両親や大人たちに強い反抗心を抱いていた。だが詩の創作がうまくできないことをきっかけに、自分の未熟さを感じ始める。以前に両親から「お前はろくなことをしない」と言われた時に彼は猛烈に反発したのだが、自分の年齢では何事もまだうまくはできないことを悟り、両親の主張が正しかったのだと思い至る。同じような流れが、「テゼの船」の第 I 章後半に書かれたエピソードに関して見られる。金曜日、ホテルのレストランでの昼食時に、ボンシニョールは見知らぬ男性ふたりの会話を偶然耳にした。彼らはある人物の悪行について噂しており、彼は成金の典型である等と言っている。ボンシニョールはそれがどうやら自分についての噂であるらしいと気がつく。ボンシニョールの名は具体的に挙げられないものの、知人で仕事上関係のあったロベールという人物の名が彼らの話に登場しているからだ。彼はボンシニョールによって破産させられたとふたりは話している。それは全くの誤解であり、いわれのない非難だと第 II 章でボンシニョールは反発する。しかし第VI章において今までの人生を振り返った時、彼は様々な悔恨の念にかられ、実際に誰かを破産させたことはなくとも自分は非難されてしかるべき人間である、という結論にたどりつく。社会的に成功した中年男性の内に 13 歳の少年の影が見え隠れするのは、非常に興味深い。ボンシニョールが、自己確立に悩んでいた少年の成長した姿であるように思われる。

『秘めやかな心の声…』に関して言えば、一日目にボンシニョールが列挙する「自分が幸せである理由」が、まるで『秘めやかな心の声…』の若き主人公リュカ・ルテイユが書いた「来年のための計画」に対する応答のように思われて興味深い。間もなく 22 歳になろうとしているリュカは、年上の人妻との恋愛にうんざりしている。列車の中で様々な思いを巡らすなか、リュカは以前に書いた「来年のための計画[(6)]」のことを思い出す。完成後彼はその内容に羞恥心を覚え、数時間後には燃やしてしまったのだが、その一字一句まで彼はいまだに覚えているのだ。内的独白の中で再現されたその計画は、「一般方針」・「経済」・「豊かにすること」という三つの項目から構成されており、若者らしい開放感や将来への希望に満ち溢れている。「利益優先の勉強や、経歴はいらない」

と「一般方針」の中で記し、「豊かにすること」の中の「経験」という項目では、「利益を求めた交際はしない」と述べて、ブルジョワ社会に対する反抗心を露わにしている。また、「豊かにすること」の「女性」という項目においては、女性、そして愛について次のような考えを披露している。まず、ふたつの側面――欲望を満たすことと愛すること――を混同してはならないと述べ、理想的な女性との出会いを待つよう自戒する。だがしかし、リュカは「知るために」夫婦生活を経験してみようと記し、その相手にウィニフレッドとエドヴィージュという二名の女性の名前を候補として挙げ、それぞれの性格や状況について書き留めている。

一方、47 歳のボンシニョールが列挙した「自分が幸せである理由」A～G は、次のようなものである。

A. — Mes appointements annuels de la S.H.C. [la Société des Hôtels et Casinos] portés de 180.000 à 250.000, — avec les félicitations du conseil d'administration, à l'unanimité, pour ce que je suis en train de « créer » au Maroc ;

B. — Avant-hier chez le président du Conseil, autres félicitations, officielles ;

C. — Hier matin, le ministre du Commerce : « C'est grâce aux initiatives d'hommes tels que vous, monsieur Bonsignor, que l'hôtellerie française, etc. » ;

D. — La rosette assurée pour la promotion de janvier (fera plaisir à Éliane[(7)], mais moins que le ruban ; on se blase!) ;

E. — Justement, la nouvelle annoncée par elle la veille de notre départ de Casablanca : notre quatrième enfant en chemin ;

F. — Ma fille aînée Jeannine reçue à l'oral du baccalauréat ;

G. — Mis en réserve ce petit portefeuille qui produira d'entrée de jeu 79.000 par an = 237.000 d'intérêts en 3 ans + les intérêts de ces intérêts (à calculer à 4 % en moyenne). (pp.1081-1082)

この直後に本人も指摘している通り、このリストは金の話で始まり、自慢話が

続き、最後も金の話で終わっている。若きリュカが毛嫌いしたような、常に損得の勘定に励む大人に、ボンシニョールは見事になってしまったという見方もできよう。だがしかし、この中年男性は決して拝金主義の人間ではなく、家族の幸せを願い、仕事に邁進しているのだ。全ては家族への、そして仕事が産み出すものに対する愛情からなのである。

> Je viens de relire cette liste, et je m'aperçois qu'elle commence par l'intérêt, se poursuit par la vanité, et finit par l'intérêt — les intérêts à 4 %! C'est ce que penserait un indifférent qui la lirait ; mais je sais bien, moi, que tout s'y rapporte à l'amour : à mon amour pour Éliane, pour mes enfants, pour mon travail et pour tout ce que mon travail produit de durable et d'utile à la Société, — en général ; et à la Société des H. et C. en particulier. (p.1082)

仕事での成功も幸せであるための要因ではあるが、それに劣らず家庭生活も重要なのだ。言うまでもなく、リストのD・E・Fは家族に関連している。ボンシニョールは自分の勲章が妻にとっても喜びとなるよう期待し、4 番目の子供の誕生を心待ちにし、娘のバカロレア合格を喜ぶ。ボンシニョールは、確かにブルジョワ社会を生きる大人となった。リュカが思い描いた計画とは正反対の道を歩んだ結果であると言えよう。しかし彼は、リュカが拒否した大人の生き方——リュカだけではなく、バルナブースや『幼なごころ』の少年少女たちも、ひたすらにブルジョワ社会の住人である大人たちを拒絶していた——を確立して人生の喜びを獲得し、そこに自分なりの意義を見出しているのである。いまやボンシニョールはリュカにとって「経験して知るべきこと」の対象でしかなかった夫婦の愛、さらに言うならば家族への愛を知っており、自らの支えとしている。彼の生活において、リュカの「計画」に見られるような自己愛に満ちた若者特有の価値観はすっかり消え去ったのであり、全く別の価値観が基盤になっていると言えよう。内的世界を開拓して他者とは余り交流せず、自意識を最大限まで拡大していた若者や少年少女の姿は、もう見当たらない。自らの仕

事に充実感を覚えると共に、子供たちの成長を見守り、妻に愛情と信頼を抱き、家族と共に人生を歩んでいくことに迷いを感じない。年齢を重ねて、ボンシニョールは若者たちが知りえなかった新たな境地へとたどりついたのである。

Ⅱ.「テゼの船の難問」――自己の同一性――

ラルボー作品の若き主人公たちは、「私（je）」という人称の不確定さを訴えていた。例えばバルナブースは、いつか自分がどういう人間なのか定まれば、ためらわず「私（je）」と書けるだろうと述べている(8)。「夏休みの宿題」の主人公は、「私（je）」の代わりに一人称複数の人称代名詞「私たち（nous）」を用いて語り(9)、『秘めやかな心の声…』においては「私」という一人称の代わりに、「君（tu）」や「彼（il）」などの二人称・三人称の人称代名詞が使用されている箇所がある。つまり、意味の上では明らかに「私」が主語となるべき文であるのに、「私」ではなく「君」あるいは「彼」が主語に用いられているのだ(10)。こうした実験的な人称の使用には、自己確立を模索する主人公たちの不安定な気持ちが反映されていると言えよう。

一方、社会的そして精神的に安定した状況に置かれているはずのボンシニョールであっても、「私」とは何者であるのかという問いからは逃れられない。彼は「幸せな理由」を記した火曜日以降、不安な気持ちに襲われ、水曜日は手帳に何も書かない。そして木曜日、自らの不安や倦怠感を理解しようと学校で受けた哲学の授業を思い出し始める。彼は、そこで聞いた「われわれが同じ川の水を二度飲むことは決してない」という考えに非常に強い感銘を受けた。しかし、後に人間の細胞が七年間で入れ替わるということを知り、むしろ「同じ人間が同じ川の水を二度飲むことは決してないのではないか」と思い当たる。そしてこの身体が入れ替わるという事実から、テゼの船へと思いを馳せる。

タイトルにも用いられているテゼ（テセウス）の船は、自己の同一性を巡る問題の比喩として、哲学の分野で伝統的に論じられてきたモチーフである。ここで哲学的な議論に足を踏み入れるつもりはないが、この船がどのような問題

を提起してきたのか、参考までにジョン・R・サールの説明を挙げておこう。

> 一隻の木造船がある。その木造船は時とともに全体的に徐々につくりかえられる。その間も船はずっと航行するし、船を操舵して地中海周辺を運行する乗組員たちもいる。しかし、船を構成する板は徐々に張り替えられ、しまいにはもともと使われていた板が一枚もなくなってしまう。それでもこれは同一の船なのだろうか？　ほとんどの人はそれが同一の船だと感じるのではないかと思う。船としての機能が時間的空間的に継続していること、それが同一の船であることを保証するのに十分な理由だと感じるのではないだろうか。というのも船という概念は、結局のところ機能にかかわる概念だからだ。ではここでこう考えたらどうか。誰かがその木造船の板の張り替えで捨てられた板を全部集めて、もともとその船が造られた材料だけを使って船を建造したとする。この結果できあがる第二の船に使われている板はすべてかつてオリジナルの船に使われていたものと同一である。このとき、もともと最初にあったのはどちらの船だろうか？[(11)]

このように、「船」――人間にとっては身体――は、物質な形にすぎない。「船」の板のように人間の細胞が別の人間の為に再利用されることはないが、ともかくアイデンティティーを形成するのはその機能――常に継続して存続する機能なのである。ボンシニョールがたどり着いたのも、まさに同じ考えである。彼はその人間の「機能」を思考（pensées）や行為（actes）として表現している。

> Notre forme change, mais l’idée de nous-mêmes en nous-mêmes, indestructible, demeure, et quoi qu’on me dise, et en dépit de mon désir de me libérer même de cette continuité, je ne peux m’empêcher de sentir à chaque instant la solidarité de moi-même avec toutes mes pensées et tous mes actes aussi loin que peut aller ma mémoire consciente et au delà encore, aussi profondément que plonge ma mémoire inconsciente. (p.1097)

形、つまり細胞が入れ替わっても、私たち自身に関する観念は、不変のものである。あらゆる瞬間に、自分の思考の全てそして行為の全てと連帯を感じて生きていく者、それが「私」であるのだ。ボンシニョールはさらに、自分が犯した罪について思いを馳せながら、「私」について思考を進めていく。ホテルのレストランで耳にした見知らぬ男性ふたりによる非難は、的外れではない。そして自分の人格は、過ちと後悔によって形成され存在すると述べるのだ。

> Mais ils avaient raison de *m'accuser*, me faisant ainsi comprendre que c'est par le souvenir que je garde de mes fautes, et par le regret que j'en ai, que ma personnalité, mon unité dans le temps, malgré le temps, est constituée, existe, — et non par le souvenir de mes plaisirs et de mes succès. [...] — le souvenir, jamais bien loin de nous, de tout cela, avec le regret, impossible à étouffer complètement, qui en demeure au fond de nous, au fond de moi, — cela, c'est vraiment Moi ; [...] (pp.1097-1098)

このように、彼は喜びや成功よりもむしろ自分の罪や後悔を思い出す。つまりたどりついた「真の私」とは、消すことのできない、後悔と共に思い出される過去そのものであった。「私」とは、私がとってきた行動そのもの。そして、「死」だけが自己嫌悪と悲しみから解放してくれるのだとボンシニョールは書き連ねる。さらに実業家としての「私」、家庭生活の中での「私」、といったさまざまな「私」を離れて自分自身に向き合った時、イタリア語の表現にならえば、私はそういうものを「やった」のだった、と彼は思う。（イタリア語では、フランス語とは異なり、職業を言うのに「私は運転手である」ではなく、「私は運転手をやっている」と表現することをボンシニョールは説明している[12]。）全てから解放してくれるのは、死である、と彼は述べる。自分は何よりもひとりの人間なのであり、「罪人であり、死に値する」のだ[13]。若者や少年少女たちとは異なり、ボンシニョールは将来についてひたすら希望に満ちた展望を述べるわ

けではない。若者たちは既成の価値観、そして大人に反抗することで現実からの解放を思い描いたが、中年男性は死をもって解放を思う。だから、ボンシニョールは「死」に対して否定的ではない。生まれた時から人は死に向かって歩んでいくが、死こそが罪の意識から解放してくれることを認識することによって、自己嫌悪に苛まれることがあっても生きていけるのだ。

そこにはもちろん、母親の影響でプロテスタントの教育を受けたものの、1912年にカトリックに改宗したラルボーの宗教心が色濃く反映されているには違いない。だが、ボンシニョールの手記には、若者たちとは明らかに異なった「私」の捉え方、そして「私」が現実で生きていくための術について記述がなされていると言えよう。

Ⅲ．頭文字「V.L.」

ラルボー作品における「私」をめぐる問いは、前章で言及したような「私」を示すのに « je » 以外の人称を用いる、という手法のみにはとどまっていない。例えば『幼なごころ』に収められた「ローズ・ルールダン」に現れる「私」と「あなた」、『フェルミナ・マルケス』におけるジョアニーと「私」といった関係は、主人公とその心理や行動を見つめる別の視点が存在していると解釈できよう。また、『幼なごころ』の数篇においては、客観的視点の存在によって主人公の主観を相対化する、といった手法も見られる(14)。

一方「テゼの船」においては、また違った形で「私」に対するアプローチが現れる。それは第Ⅳ章の最初に登場する「L...」という頭文字(15)、そして同じ章の半ば過ぎに登場する「V.L.」という頭文字である。息子にギリシャ語の家庭教師を見つけるよう妻に頼んだ話やギリシャ文化に対する熱意を書き綴った後、ボンシニョールは次のように続けている。

Je me rappelle la surprise de V.L. lorsque, m’ayant demandé ce que je pensais de l’*Aphrodite* de Pierre Louys qu’il m’avait conseillé de lire, je lui ai répondu que

c'était comme un post-scriptum galant et poétique ajouté au *Jeune Anacharsis*. (p.1092)

「L...」と「V.L.」、この二人の人物に関しては頭文字以外に情報がなく、ボンシニョールとの間の関係はよくわからない。だが少なくとも、「V.L.」の頭文字に、著者ラルボーの姿を一切認めないわけにはいかない。となれば、この場面において興味深いのは、主人公とは別の人物として、作者の存在が示されているということである。『A.O.バルナブースの日記』や『幼なごころ』等の作品においては、主人公たちのなかにラルボー自身の姿が垣間見られた。同様に、ボンシニョールにギリシャ古典文学に強い関心を寄せていたラルボーの姿を重ね合わせるのは容易であろう。だが、ボンシニョールはそういった登場人物たちとは異なっているのではないだろうか。

すでに述べたように、バルナブースやリュカたちは自我に対する不安に常につきまとわれていた。バルナブースが「私」と記すことさえためらったことから、樋口裕一氏は、ラルボーが重度の自己分裂者であったのではないかと説明している(16)。自己分裂者という判断の妥当性はともかく、主人公たちが「私」という人間を確立すべく奮闘しているのは確かである。「テゼの船」においても同様に、ラルボーはボンシニョールに自らを重ねつつも、「私」には収まりきれない、作者である「私」の存在を頭文字で示さずにはいられなかったのであろうか。しかしバルナブースやリュカの場合とは違って明らかに主人公が作者とは別の人間として線引きされている点について考察を進めていこう。

ボンシニョールによれば、人間の細胞は定期的に入れ替わる。だがその思考、行動によって人間の同一性は維持されている。この考え方を作家活動になぞらえるのならば、「私（＝作家）」の「思考」や「行動」はすなわち作品となるであろう。だとすれば、作中人物たちは、執筆時の作者の「細胞」でできた者であるとは表現できないだろうか。人間の身体は入れ替わっていく。その人間の同一性は、時間的に連続している機能によってのみ保たれる。同じ人間が同じ川の水を飲むことは二度とない――ある作品を執筆している時の作家は、それ

以外の作品を書いた時とは同じ身体ではないということになる。作家である「私」は常に入れ替わっていく。作家は、作中人物たちと連帯感を感じながら作品を完成させ、その後は新しい細胞を持つ者となっていく。作中人物は、いわばその時の作家の細胞の抜け殻を身体とし、ページに刻まれている。そこで、作者を示す頭文字である。ラルボーは自分の頭文字を記すことによって、自らが生み出した作中人物に、細胞だけではなく、独立したアイデンティティーを与えたように思われるのだ。ボンシニョールは作者とは異なる人間であることが宣言され、作者と対等の者になり、彼に固有の「私」となる。

次に作者の方を注目してみよう。細胞が入れ替わっていく作者の「私」は、いわば常に「死」を経て、新たな身体で生きていく。だとすれば頭文字は、実はそうした時の流れに対する作者のささやかな抵抗であるとは読み取れないだろうか。主人公を自分から切り離す一方で、作者であるその時の「私」を、ページの中に頭文字で刻印したのだ。同じ身体で創作することは二度とない、その時限りの「私」――作中のボンシニョールは、作者の着想がその根底にある、いわば作者（船）が脱ぎ捨てた後の板で作られた「私」である。一方作者は、修理され、板が張り替えられながら――新しく生まれる細胞と共に――航海を続けていく船であるのだ。作品の執筆時に停船したその姿が、頭文字によって密かに刻まれているように思われてならない。

おわりに

大人に反抗していた少年や青年の影を内に秘めながら、主人公の中年男性は人生において成功し、新たな価値観を獲得した。だがその一方で、「私」がどういう人間であるのかを自問し、これまでの自分の行動に悔恨の念を覚える。作者はと言えば、頭文字によって自らの存在を密かにページに書き付け、主人公にアイデンティティーを与える。そうした作者自身の存在の主張は、細胞が入れ替わって何度も「死」を迎えている「私」の、現実に対するささやかな抵抗ではないかと思われるのだ。

最後に指摘しておきたいのは、この作品は短編ながらも様々なモチーフに富んでおり、語るべきことはまだいくつもあるということである。例えば、はるか古代の船に思いを馳せ、主人公が思い出すローエングリンのメロディー。まるで古代の船と対比させるかのように言及される列車、客船、飛行機そして自動車といった現代を象徴する数々の乗り物。古典を愛し、そして現代の偉大な発明である乗り物の恩恵を受けて旅行を重ねたラルボーの、「私」以外への関心について論じるための材料は非常に豊富であると言えよう。しかし、それらについては、稿を改めて論じることにしたい。

使用テクスト

Valery Larbaud, « Le Vaisseau de Thésée », *Aux Couleurs de Rome* in *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1957, pp.1079-1105.
各引用後の括弧内にページ数を記す。

注

岩崎力氏による「テゼの船」の翻訳が、1990 年の 10 月号から 1991 年の 3 月号の 6 回に分けて雑誌『ふらんす』（白水社）に掲載されている。適時参考にさせて頂いた。

(1)『コメルス』は、1924 年にラルボーがポール・ヴァレリーやレオン＝ポール・ファルグとともに創刊した季刊誌である。

(2)『A.O.バルナブールの日記』ではラルボーのイタリア観が色濃く現れている。
壇上文雄、「『A.O.バルナブールの日記』にみるヴァレリー・ラルボーのイタリア旅行」、『鈴峯女子短大人文社会科学研究集報』、第 29 号、1982 年、pp.63-72.
また、Béatrice Mousli が、イタリアに関係したラルボーの手紙や日記の文章を « Italie, le pays le plus aimable de la terre » という章の中に編集している。
Béatrice Mousli, *Voyager avec Valery Larbaud, Le Vagabond sédentaire*, La Quinzaine littéraire, 2003, pp.217-258.

(3) Anne Chevalier, « L'Un et le multiple — Essai sur *Le Vaisseau de Thésée* — » in *Europe,* n°798, octobre, 1995, p.111.

(4) ラルボーは数多くの旅行をするなかで、ホテルの経営者という人間に関心を寄せて

いた。

(5) Anne Chevalier はラルボー作品の中心的テーマを « une méditation sur le *moi* » と表現している。*Ibid*., p.111.

(6) Larbaud, *Mon plus secret conseil…* in *Œuvres*, pp.668-671.

(7) エリアーヌという名前からは、当然『幼なごころ』のなかの「十四歳のエリアーヌ」の主人公が思い出される。1907〜1908 年に書かれたこの短編の少女の 25 年後の姿とすれば 39 歳であり、ボンシニョールの妻として不自然ではないだろう。こうした作品間の同一人物の登場は、『幼なごころ』のなかでも見られる現象である。

(8) バルナブースは次のように« Je » の不確定さを述べている。

L'image que chacun se fait de soi-même : comme on la voit du premier coup d'œil, chez les hommes mûrs! Chez moi elle n'est pas encore formée, voilà tout, — et c'est ce qui me fait croire à la sincérité de mon analyse personnelle. Mais avec les années mon personnage se fixera sans doute ; alors j'écrirai « Je » sans hésiter, croyant savoir qui c'est. Cela est fatal, comme la mort... (Larbaud, *A.O.Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* in *Œuvres*, p.94.)

(9) 「夏休みの宿題」における « nous » について。拙稿「ヴァレリー・ラルボーの語り手における « nous »の問題」、『年報・フランス研究』第 35 号、関西学院大学フランス学会、2001 年、pp.83-94.

(10) 例えば『秘めやかな心の声…』の第一章で、次のような一節が見られる。

« Et si je la ramenais à son mari » : c'est aussi indigne de lui, Lucas Letheil, aussi bassement sot que s'il avait tendu le poing dans la direction de cette porte derrière laquelle il y a la chambre où Isabelle dort. (Larbaud, *Mon plus secret conseil…* in *Œuvres*, p.650.)

Lucas Letheil は内的独白を語る主人公自身の名前である。

(11) ジョン・R・サール、『MiND（マインド）— 心の哲学』山本貴光・吉川浩満訳、朝日出版社、2006 年、pp.355-356.

(12) Larbaud, *op.cit*., p.1090.

(13) *Ibid*., p.1100.

(14) この問題については、次の論文を参照。

樋口裕一、「見えない語り手・見えない聞き手——V．ラルボーの « 語り» と «人称»」、『Walpurgis』、国学院大学、1984 年、pp.137-153.

『幼なごころ』における主観的・客観的視点の存在について。

拙稿« Deux points de vue sur l'enfant ou l'enfance dans les *Enfantines* de Valery Larbaud »、『年報・フランス研究』第 39 号、関西学院大学フランス学会、2005 年、pp.25-34.

(15) Larbaud, *op.cit*., p.1088.

(16) 樋口裕一、「見えない語り手・見えない聞き手――V. ラルボーの« 語り»と«人称»」、『Walpurgis』、国学院大学、1984 年、p.144.

（文学研究科研究員）